
一日だけの帰省

紅月夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一日だけの帰省

【Nコード】

N0718J

【作者名】

紅月夜

【あらすじ】

まだ、日番谷が真央霊術院にいてないとき……雛森が一日だけ帰ってきたー！

「おばあちゃん、シロちゃん、ただいまあ!!」

西流魂街一地区“潤林安”の一角に雛森の元気な声が響いた。

「おかえり、桃」

囲炉裏の前に正座したおばあちゃんは、元気よく入ってきた女の子を見て、顔をほころばせた。

「ただいま、おばあちゃん。これ、お土産の甘納豆」

雛森は帰ってくる途中で買った、甘納豆の小さな包みを一つ手渡した。

「ありがとう、わざわざ買ってきてくれたのかい。それで、今度はいつまで居れるんだい？」

雛森は人差し指をたて、顎にあてた。

「んー…っと、明日の朝早くにはここを出て、学院に戻らないと授業に間に合わないかなあ……」

「もう少しゆっくりできないのかい？」

おばあちゃんの残念そうな言葉に、雛森は困ったように笑った。

「駄目だよ。今回は日曜日で授業がないから、帰省許可が出たんだもん。月曜日にはちゃんと帰らなきゃ。それに年末年始もまた帰ってくるんだし」

それをきいておばあちゃんはまた微笑んだ。

「……おいしいおせちを用意して、待っとるよ」

雛森も一緒に笑った。

「ありがとう、おばあちゃん!!」

「ところで、おばあちゃん。シロちゃんは？」

雛森は幼なじみの白い頭が見あたらず、きよろきよろしながら聞いた。

「冬獅郎なら森の滝壺のところに引っ取るよ。そろそろ暗くなってくるから、呼んできておくれ」

「わかった！！じゃあ、ちよつと行ってきます」

雛森はさっきおばあちゃんにあげた包みより、一回り程大きい包みを柵の中に隠してから出かけた。

雛森が滝壺に着いたころ、森の中はもう暗かった。

「シロちゃん……ど、何処にいるの……？早く帰ろうよう……」
雛森は何か出そうな雰囲気と師走の寒さのせいで声が震えていた。

「……怖いんならこんなところまで来るなよ、寝シヨンベン桃」

滝壺を見下ろせる崖の上に立っていた雛森は、自分の真下から聞こえてきた声に飛びあがった。

「うひゃあっ！！！！！」

見ると、白い髪の毛の先が切れた地面の先からのぞいていた。

「なんでそんなとこにいるのよ、シロちゃん！！危ないから早くこっちに来なさい！！」

「うっせえ。俺が何処にしようが俺の勝手だろうが。それに、俺はお前程どんくさくねえ」

日番谷が立っている場所は、その昔雛森が今立っているところから飛び移ろうとして、足を滑らして下の滝壺に落ちた岩の上だった。

「も、もうあのときとは違うもん！！」

「どうか」

「そ、そんなことより、早く帰らないとおばあちゃんが心配するよ！！」

日番谷は暗くなった周りを見て、慌てて岩から崖の上には飛び移った。

「やっべ……いつの間にこんなに暗くなっただ？」

さっきまで明るかった筈なのに、とぼやきながら走り出す日番谷。

「あ、待てよう」

慌ててそれを追いかける雛森。

「冬だから日が落ちるのが早いんだよ」

「わかってるよ。しゃべってる暇があったら走れって、お前足おせえんだから」

「シロちゃんひどい！！学院に入ってから足速くなったもん！！」
雛森は頬を膨らまして、怒ったように言った。

「足遅かったら死神として駄目だろ」

「もう遅くないもん！！」

「じゃあ、家まで競争するか？」

「……絶対負けないよ！！」

「決まりだな。」

「じゃあ、よい……どん！！」

日番谷のその言葉によって二人は同時に走り始めた。

「お前達、一体何をして帰ってきたんだい？」

数分後、家の玄関に二人が倒れていた。

「も、桃と、きよ、競争して、か、帰って、きた」

「シ、シロちゃんが、あ、あたしの足、お、遅いつて、い、言うから……」 息も切れ切れに言う二人におばあさんは呆れたように返した。

「……そんなに汗をかいてるのに、そんな薄着じゃ風邪ひくよ。ほれ、早く汗を拭いて着替えておいで」

タオルと着替えを手渡されて、二人はようやく体を起こした。

「「はい」」

二人が着替えてくると、沢山の料理がちゃぶ台の上のついていた。

「うわぁ、美味しそう!!」

「なんでこんないっぱい……」

「二人ともあんなに汗をかく程動いたんだったら、お腹も空いたろう？ ほれ、た〜んとお食べ」

おばあちゃんはちゃぶ台の前に座り、二人にも来て座るように手招きした。

「いっただつきま〜す!!」

「いただきます」

「はい、よろしおあがり」

二人は手を合わせて言い、おばあちゃんのご飯をよそって手渡した。

「今日は特別な日だからねえ、張り切って作ったんだよ」

「うん、おいしいよ、おばあちゃん!!」

「ばあちゃんの作る飯は、何でも美味しい」

二人は口をもぐもぐさせながら言った。

「そうかい、そうかい、そう言ってもらえると頑張って作ったかいがあるねえ」

そう言っておばあちゃんも食べ始め、三人で仲良く喋りながら机の上のご馳走をたいらげていった。

いつしか話は雛森の通う真央霊術院の話になっていった。

「……鬼道って言ってね、言霊を詠唱して虚を攻撃したり、怪我を治したりするの!!」

「どんながあるんだ？」

「えっとねえ……火の玉みたいなを出したりとか、鎖みたいなので相手を拘束したりとか、いろいろ」

「へえ……」

雛森は少し興味があるらしい日番谷を見て、ある事を思いついた。

「あ、そうだ、シロちゃん、後で一つだけみしてあげる!!」
「……は？」

何をだ？と、雛森の意図が読めず、首をかしげる日番谷。

「ええっと……縛道をかけるわけにいかないから……破道かなあ……どれにしよう？」

「は？おい、桃？お前一体何を……？」

「そうだ!! さっきの滝壺に行ったらちょっと派手なものできそうだね!! あ、でもおばあちゃんはどうしよう？」

「ばあちゃんは家に居てるよ。二人で行っておいで」

雛森は、一人訳のわかっていない日番谷を引っ張って立たした。

「そうと決まれば、ほら、早く行くよ」

「え？ちよっ、おい!？」

日番谷は雛森にほとんど引きずられて行った。

「じゃあ、そこで見ててね、シロちゃん!!」

「……なんでこんなことになってんだ？」

さっきまで、ばあちゃんのおいしい料理を食べていた筈なのに……と、首をひねる日番谷。

「見ててってば、シロちゃん!!」

「わかったよ!……ったく、なんで俺が……」

「じゃあ、いくね！」

“君臨者よ!”

“血肉の仮面・万象・羽搏き・ヒトの名を冠す者よ!”

“真理と節制”

“罪知らぬ夢の壁に僅かに爪を立てよ!”

破道の三十三!! 蒼火墜!!」

雛森の手のひらから生じた青い火の玉は、真っ直ぐ飛んでいき、滝にあたった。

「やったあ!! ってきやああっ!!」

「うわっ!!」

冷たい水に高温の火をぶつけたことにより生じた水蒸気と、滝と蒼火墜がぶつかった際の衝撃により軽く立った水柱で、雛森も日番谷も完全に濡れてしまった。

「桃、お前なあー……手加減するとか、他の術にするとか、もつとマシなもんを思いつかなかったのかあ!!!!!!」

「ご、ごめえんシロちゃん!!」

わざとじゃないから許して、と上目使いで懇願してくる幼なじみに、日番谷はため息をついて言った。

「……さっきの術、威力をセーブして留めておくってできるか?」

「へ? えっと……ちよつと難しいかなあ……あ、でもちよつと待つて……ええつと……破道の三十一、赤火砲!」

別の術を使い、雛森は自分の胸の前で、赤い火の玉をふよふよと浮かした。

「こんな感じ?」

「おう」

「でも、なんで?」

「あったかいし、服も乾くだろ」

「え? あ、ホントだ! でも、シロちゃんはどうするの?」

「俺はいいんだよ」

寒さには馴れてるから……と言う日番谷を見て、雛森は怒った。

「よくない!! 風邪とかひいちゃったらどうするの!?」

そう言いながら、火の玉を日番谷のほうに寄せる雛森。

日番谷は雛森の言葉に驚きながら、言い返した。

「俺はいいんだって!! お前は明日学校あるんだろ!? 死神になりたいんじゃないのかよ!!」

「それとこれとは話が別だよ!!」

「別じゃねえ!!」

「死神にはなりたくないけど、シロちゃんが風邪をひくのは嫌だもん……」

…

泣きそうな雛森を見て、日番谷は頭をかきながら言った。

「ああ、もう！！わかったよ！！……俺もそれやりゃいいだろ！！」
「へ？」

目をぱちくりとさせる雛森を放っておき、日番谷はこんな感じか？
と言いながら構えた。

「え？ええっと、シロちゃん？な、何するの？」

「うるさい、桃。……なんだったっけ……確か……破道の三十一、
赤火砲」

ぽふっと小さく音をたて、日番谷の胸の前にも赤い火の玉ができた。
「よし、できた」

「えええっ！！なんでええ！？なんでできるのシロちゃん！？霊術
院でもまだできない人いるのに！！」

「さつきから桃、うるせえ。っていうか、こんなのできない奴は馬
鹿だろ」

平然として言う日番谷に、雛森は、馬鹿って言われたよ、阿散井君。
と思いながら、笑うしかなかった。

二人が家に帰るころには、服は完全に乾いていた。

「ただいま、おばあちゃん」

「ただいま、ばあちゃん」

「おかえり、桃、冬獅郎」

家の中から顔を覗かせたおばあちゃんは、二人を見て驚いた。

「二人とも、それは何だい？」

日番谷と雛森は自分達の胸の前で浮いてる火の玉を見て、滝壺での
ことを話し始めた。

「すごいよね、シロちゃん！！」

「そうだねえ、冬獅郎はすごいねえ」

「シロちゃんも死神になればいいのに……」

「誰になるか!!」

放っておくと口喧嘩を始めそうな二人を、おばあちゃんは遮った。

「ほらほら二人とも、明日は早いんだから、もう寝なさい」

「え? もうこんな時間!? あたしもう寝るね!! おやすみシロちゃん、おばあちゃん!!」

雛森は日番谷に一方的におやすみを告げ、別の部屋でさっさと寝てしまった。

「は?」

後には、呆然とした日番谷と自分も寝ようとしているおばあちゃんが残された。

「ほれ、冬獅郎。ばあちゃんも寝るよ。早くおいで」

「え?」

日番谷はあまりの展開の早さに、のろのろとおばあちゃんの言葉に従うしかなかった。

「おやすみ、冬獅郎」

「……おやすみ、ばあちゃん」

翌朝、家の前には霊術院に戻ろうとする雛森と、見送ろうとする日番谷とおばあちゃんの姿があった。

「じゃあ、一週間後ぐらいにまた帰ってくるね」

「二度と帰ってくんな、寝シヨンベン桃」

「またこの子は、そんなこと言って」

三人はいつものようなやりとりをして、ふと雛森は何か忘れているような気がした。

「どうしたんだい桃?」

授業に遅刻することを心配しておばあちゃんが言った。

「んー……何か忘れてる気がする……」

「何か?」

「うん……なんだろう?」

「持ってきたのはその風呂敷包みだけじゃないのかい？」

「ええっと……あ、そうだ！……！」

雛森は慌てて家の中に駆け込み、棚から手のひらぐらいの包みを出して、日番谷に手渡した。

「これシロちゃんに渡すの忘れてた。」

お誕生日おめでとう！！シロちゃん♪」

「……シロちゃんって呼ぶな、寝シヨンベン桃」

最後の部分を強調されて言われ、日番谷は嬉しいやら恥ずかしいやらでいつものことしか言えなかった。しかし、礼は言わなければ、と思いなおし、小さくつけたした。

「……………」

……………ありがとう」

「えへへ、どういたしまして」

雛森は嬉しそうに笑い、はたと空を見て慌てて霊術院に向かった。

「じゃあねえ、シロちゃん、おばあちゃん！！」

おばあちゃんは、気をつけるんだよと言いながら、日番谷は無言で手を振った。

日番谷がもらった包みには、おばあちゃんと同じ甘納豆が入っており、正月に雛森と食べようと、また棚の中にいれられたとき。

(後書き)

珍しく長いです。

でも、ぐだぐだ感は無くなりません（／＼；）

おばあちゃんの口調とか、いろいろわからないまま書いたので……

えっと、まあ、とりあえず、お誕生日おめでとうございます、日番

谷隊長「（．．．）」

ここまで読んでくださり、ありがとうございますm（＿）m
感想等お待ちしております

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0718j/>

一日だけの帰省

2010年10月28日07時46分発行